

Gift for the Next 100 Years

Vol. 6

グリーンキャンプに関する学びを深めるため、今年も143号で紹介したEl Tesoro de la Vidaというグリーンキャンプに参加してきました。今回は私たちの行くキャンプのグリーンケア・スーパーバイザーである西田正弘さんのレポートで紹介します。

📦 キャンプ成功の秘密

「昨年よりはうんとまし」と、スタッフは口をそろえて言っていたけれど、テキサスの夏は連日40℃を超える厳しいものでした。昼間の熱気はベッドのマットレスを温め、時差ボケと相まって、夜中に何度も目が覚めます。そのたびにキャンパーの表情の変化が思い浮かんで来て、「このグリーンキャンプの秘密は何だろう？」という問いが、頭の中でふくらんでいました。

話はいきなり最終日に飛びますが、1週間のキャンプを終え、子どもたちが帰ったあとでスタッフの何人かに質問をしてみました。「私は率直に、あなたたちはステキな大人だと思うけれど、前からステキな大人だったの？ それとも、キャンプが影響しているの？」彼らは互いに顔を見合わせて、「そんなことは考えたこともないけれど、ただ子どもたちを大事に思って、自分もキャンプを楽しんでいるよ」と笑って答えてくれました。

大切な家族を亡くした5歳から17歳までの150人の子どもに、20代半ばから60代までのスタッフ80人で行う6泊7日のキャンプ。これは、私が持っているものさしでは量りきれない出来事だったのだと改めて思いました。

それでもあえて謎解きを試みると、キャンプの秘密はこんなところにあるのではないかという結論に達します。

- ・開放感あるキャンプ場（テレビや自動販売機等がない・最小限の照明）
- ・楽しいプログラム構成（子ども自身が選ぶ・楽しさ・開放感）
- ・死別体験の分かち合いの持ち方（ルール・ワーク・率直なやりとり）
- ・おいしい食事（肉料理・サラダバー・フルーツ・お菓子※ただしコーラはない）
- ・誠実な大人たち（人懐っこく包み込む・楽しい雰囲気・子どもへの敬意ある態度）

キャンプは日曜日の午後から始まります。初日は、広場に集まってグループで自己紹介、全員でキャンプのルールを確認し、おいしいご飯を食べて、ゆっくり過ごします。2日目から、午前中に3つのコマがあり、アーチェリーや乗馬、クッキング（バター作りなどの単純なもの）などのアクティビティと死別体験をシェアする時間が組み合わされます。午後は気温がぐっと上がるので、キャンピングでひと休み。夕方にプールの時間があって、夕食後は、マジックショーや

ダンスパーティなど、日替わりのお楽しみプログラム。楽しいことが90%で、死別体験を語り合う時間が10%という感じです。豊富なメニューの中から自分で選び、やりたいことをやって思いっきりエネルギーを発散させることが大事にされているのだと感じます。



近隣のボランティアが用意してくれたロディオナイト

📦 グループでの分かち合い

キャンプ2日目から始まった死別体験を語り合う時間は、午前の3コマのうちの1つに位置づけられていました。私は小学校高学年の男の子6人のShark(サメ)グループに参加させてもらったのですが、そこには父親が母親を殺したという兄弟、父親が自殺した子、父親が事故で亡くなった直後に母親が病気で亡くなった子などがいました。

まず印象的だったのは、ルールの確認方法でした。場を仕切るセラピストのクリスは、「この場所のルールにはどんなものがあると思う？」と子どもたちに問いかけました。そして、「Rで始まる言葉と、Cで始まる言葉だよ」とヒントを与えます。さまざまなやりとりの中から、「Respect(敬意を払う・尊重する)」と「Confidence(信頼する)」という言葉を引き出し、「自分の気持ちを大事にし、他の人も尊重しよう。みんなが話したことを否定することはしないで、話したくないという人の気持ちも尊重しよう」と語りかけまし



クッキング(?)の様子

キャンプを支える大人たち

El Tesoro de la Vida リポート

た。このような場でよくルールと言われる「言いたくないことはパスしてもいい」ということを子どもたち自身から引き出したのです。

1回目のワークは、大切な人との死別の前後の家族の様子をA3サイズの紙の左右に言葉や絵で表現するというもの。そして、それについてそれぞれが話をしました。しかし、父親が母親を殺した兄弟とのやりとりで時間切れ。セラピストは、「つらい話が多く、虐待されている可能性もあるため、やりとりに長く時間をとった」と振り返っていました。

2回目は、前日の続き。この場に安心しているのか、次々に話が続きます。涙があふれた子には、「涙が出るのは自然なことだよ」と声がかかります。キャンプに初参加のパトリックはなかなか話し出すことができず、「明日、話す」と約束して終わりました。そのことで、それぞれにペースがあり、それが尊重されるのだと共有できたようでした。

3回目は、キャビンバディ（子どもたちといっしょに生活するボランティア）の経験談からスタートし、パトリックが話せる雰囲気を整えられました。そして彼が話をし、私も12歳のときに交通事故で父親を亡くした自分の経験を少し話しました。

4回目は、小さな植木鉢を使ったワークでした。まず、ハンマーで砕かれた破片の内側に大切な人を亡くした気持ちを書きます。そこには「Sadness (悲しい)」「Loneliness (さびしい)」「Love (愛おしい)」「Anger (怒り)」などが書かれます。そして、外側には、その気持ちへの対処方法を書きました。たとえば「さびしい」と書かれた破片の裏には、「外へ出て友だちと遊ぶ」と書かれていました。これらの破片や色とりどりのビー玉などを貼り付け、フォトフレームを作りました。



Shark グループのボードは右から3番目。年代によって表現が異なるのが興味深い。

5回目は、前半にキャンプの感想を中心に語り合い、後半は畳一畳ほどの大きさのボードにキャンプ中の気持ちを表す言葉を3つ書き、絵の具で手形を付け、スプレーペンキで好きな絵を描きました。できあがったものは、結果的に何か混沌とした彼らの気持ちを表したようなものでした。

6回目は、グループでの最後のセッションです。キャンプ全体の感想とグループのみんなに伝えたいことを言い合いました。「アーチェリーが楽しかった」「ご飯がおいしかった」「普段言えないことを話したから、この仲間は家族だ」、こんな言葉が交わされました。

そしてその夜は、セラピストのクリスが担当する3グループ共同のクロージング・セレモニーが行われました。前日に作成したボードに、亡くなった人の名前を書いたプレートを貼り、キャンプの感想を一言、それに合わせてスタッフがキャンドルに灯をともします。キャンドルの炎を介して、ここにいる人同士のつながり、ここにはいない大切な人とのつながりを感じるひとときとなりました。

ピアサポートを支える大人の存在

一週間という時間をフルに使い、楽しい時間を存分に楽しみつつ、ていねいに自分の気持ちに触れる場を持つことで、ほかの人の気持ちも知る。その中で、初めて会った者同士でも、次第に「仲間」になり、「家族を感じる」つながりを持つことができるようになったキャンプでした。

そして、その前提となっているのが、キャンプに関わる大人たちの深い理解だと痛感しました。親や兄弟などの大切な人との死別を経験した子どもたちは、グリーフ(悲嘆、愛惜)や経済的な困難に見舞われることが多くあり、周囲のサポートを得られない環境の中では、「生き延びている」と言ってもいい状況に陥ることがあるということ十分に理解しているステキな大人たちがこのキャンプを支えていました。彼らは、「この子のグリーフや人生の歩みを代わることはできない」ということもよく分かっているのでしょう。だからこそ、キャンプという環境の中で、害を与えず、敬意を持って接し、いっしょに楽しみながら、「人生は辛いことばかりではない」と伝えられるのではないかと思います。ピアサポートの場を支える、こうした大人たちの存在は欠かせません。

アフリカに「一人の子どもが育つには村中の人が必要だ」ということわざがあります。キャンパーとスタッフの交流を見て、話して、感じるうちに、私はこのことわざを思い出していました。



大人たちは常に子どもたちに対して敬意を持って接している